浜中町立茶内小学校「学校だより」

# THE　茶内小　TIMES

令和５年（2023年）３月27日発行　VOL 52

## 「子どもが学びの主語になる姿」を引き出す「教職員の姿」

浜中町立茶内小学校長　冨　田　直　樹

９日（木）に今年度最後の「みんなの広場」が行われました。毎回、校長から子どもたちに話をする機会があります。当日は、１年間、授業を参観させてもらったことに対する感謝の気持ちを伝えました。授業を参観していると、子どもたちの様々な表情や仕草、行動などを見ることができます。それぞれの学級で個性の違いはありますが、共通しているのは、次の４つの姿です。

①自分の考えをもとうとして、自分で、または、友達と一緒に一生懸命に思考している。
②自分の考えを言葉で伝えたり、文字に書いたりして伝えようとしている。
③互いに尊重し合って課題を解決したり考えを述べたりしている。
④どんなに難しい課題であっても解決に向け挑戦しようとしている。

このような「子どもが学びの主語になっている姿」が毎日見られるのですから、自然と教室に足が向かいます。

さて、授業を参観していると、このような子どもの姿を引き出している教職員の姿も見えてきます。本校の教職員の姿を次の５つにまとめてみました。

①子どもの関心に合わせて、教材はもとより人や場を提供しようとしている。
②保護者とは子どもの将来について、本音で語れる関係をつくろうとしている。
③子どもと問いかけ合う機会をもとうとしている。
④学校以外に、自身の力量を高めたり、将来のことや実現したいことを話し合える人や機会をもとうとしている。
⑤自分の取組（挑戦）に周囲を巻き込もうとしている。

放課後の職員室を覗いてみると、熱心に教材研究をしている姿があります。学習内容の充実に向け、地域の人材や関係機関等を活用する戦略を立てている姿があります。保護者と電話や連絡帳等を活用して、子どものことを真剣に話し合っている姿があります。子ども一人一人に適した教材を提供するだけでなく、具体的に問いかけることで、子どもが自ら考えるというスキルを獲得するよう仕掛けている姿があります。積極的に他校の公開研究会に参加したり、他校の教員や教育局の指導主事との関係を構築したりして、自身のスキルアップを図ろうとする姿があります。各種研修に参加した成果を還元したり、自身が取り組んでいる実践を廊下で公開したり、学んでいる内容を情報提供したりしている姿があります。そして、何より、子どもの頑張りや成長を言葉で伝え合ったり、学級通信等を通して共有し合ったりして、子どものことを笑顔で語り合える姿があります。

３年前、新型コロナウイルス感染症の拡大で、全国の学校は長期間の臨時休校を余儀なくされました。そのとき、「子どもの学びに対する主体性の欠如」が大きな課題として取り上げられました。本校はコロナ禍の３年間、「子どもの主体性」に焦点を当て、研究に取り組んできました。その中で、教職員の「学びに対する主体性」も育まれたのだと思います。まさに「教職員は子どもの鏡」です。